

平成31年度 日本大学付属高等学校等
高1 基礎学力到達度テスト

国 語

注 意

- (1) 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- (2) 試験開始後、問題冊子に不備（印刷不鮮明な箇所、ページのふぞろい、汚れ等）があつたら申し出てください。
- (3) テスト問題は□から■までです。
- (4) テスト時間は六〇分、一〇〇点満点です。

《解答欄記入上の注意》

解答用紙への記入に際しては必ずHBの黒色鉛筆を使用し、解答用紙の所定の記入欄以外の部分には何も書いてはいけません。マークを訂正する場合は、プラスチック消しゴムできれいに消し、マークし直してください。解答用紙は、絶対に汚したり、折りまげたりしないでください。

記述式の解答は、一つのマス目に一文字ずつ楷書で記入しなさい。なお、問題冊子内の下書き欄を使用してもよいが、解答は必ず解答用紙に書きなさい。

解答番号	解答マーク欄
10	① ② ③ ●

良い例		悪い例	  
			うすい ぬり不完全 丸囲み不可

クラス番号	クラス出席番号	氏 名

國

語

□ 一の各問いに答えなさい。

問1 「恒」という漢字の部首名として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 しめすへん 2 りっしんべん
3 こざとへん 4 のぎへん

問2 傍線部の漢字の読み方が同じ組み合わせとして、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 市街——街道 2 外科——外来
3 極上——極限 4 素朴——簡素

問3 対義語の関係の組み合わせとして、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 分析 ↔ 合計 2 理想 ↔ 本質
3 過剰 ↔ 不足 4 濃厚 ↔ 純粹

問4 構成が他の三つと異なる熟語として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 乾季 2 満足 3 要点 4 激流

問5 次の四字熟語の空欄部に共通して入る漢字として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 一進□退 □触即発
1 半 2 千 3 一 4 二

問6 次の言葉は「一度してしまったことは取り返しがつかない」という意味の故事成語になる。空欄部に入る言葉として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 覆水□に返らず
1 元 2 先 3 口 4 盆

問7 口語文法で次の三つの品詞に共通する特徴として、最も適切なものを一つ選びなさい。

動詞 形容詞 形容動詞

- 1 ものの性質・状態・感情などを表す。
2 それだけで一文節を作れる。
3 活用の種類が複数ある。
4 言い切りの形が「い」で終わる。

問8 尊敬語として最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 令嬢 2 拙宅 3 粗品 4 弊社

問9 「係り結び」が使われていない文として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。
2 その煙、いまだ雲の中へ立ち上るとぞ、言ひ伝へたる。
3 その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。
4 また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。

問10 『高瀬舟』『山椒大夫』の作者として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 森鷗外 2 菊池寛 3 宮沢賢治 4 夏目漱石

問題は次ページへ続く

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい（設問の都合で省略した部分がある）。

*ヘミングウェイという作家は作品ができ上がっても、すぐそれを発表するようなことはしなかったらしい。書き上げると、まず、銀行の貸金庫に入れて寝させておく。ある期間そうしておいてから出してきて推敲する。それで気に入ればよし、さもなければ再び貸金庫へ戻した。こういうことをして、ついに納得のいくところまで行かなかった作品が遺稿となったというわけである。

こういうことは、多くの人がしていることであろう。ヘミングウェイが貸金庫を利用したのはいかにもアメリカ的であるが、東洋の文人が篋底に秘めるのと同じ異曲である。

推敲というのは、時間のからむ問題である。この言葉が中国の唐の詩人賈島^{*かとう}の故事に由来するのはよく知られている。「鳥は宿る池辺の樹、僧は敲く月下の門」という句を得た賈島は、この「敲く」がいいか、初案の「推す」がよいかで迷いに迷った。考えあぐねているうちに韓退之^{*かんたいし}の行列につき当たる。とがめられて事情を語ると、韓退之は「敲く」がよろうと言った、というのである。

賈島は寝させないで推敲をしようとしたらしく思われる。これがヘミングウェイの例などと比べて違っている。本当の推敲とはヘミングウェイ式のものである。ご本尊の賈島は推敲の何たるかを、すくなくとも時間⁽¹⁾の要素がからむものであることを、しっかりとわきまえていなかったのではあるまいか。それだからこそ、他人の行列にぶつかると夢中になって考えでも決着がつかかねた。

韓退之の助言によって「敲く」にきめたというのは、時間的距離を他人の目という空間的距離に移行させたものだと考えることもできる。推敲は本人が時間の軸において、つまり、しばらくたってから行うテクストの改変である。他人が空間的軸で行う同種の改変のことは添削という。韓退之

の助言は添削の一種だったのである。

わが国の短歌、俳句では、添削はいまなおごく普通に行われているが、一般に、近代文学においては、添削を受け容れる余地はないように考えられている。作品の改良はただ推敲だけによるほかはないかのごとくである。ところが、必ずしもそうではないらしいのは、T・S・エリオットの『荒地^{あれち}』の例を見てもわかる。現在われわれの知っている『荒地』は、詩友エズラ・パウンドの徹底的な斧鉞^{*ふえつ}を受けたものである。添削以外の何ものでもない。詩人自らでは、とうていこうした改変を敢行できなかったであろう。

興味あるのは、『荒地』のもとの原稿が詩人の生前すでに行方不明になっていたことである。添削を受けた方のテクストが傑作だとなれば、もとの形に用はなくなる。新しい異本は先行テクストを排除、湮滅^{*えんめつ}させる習性をもつが、ここでもその発動が見られる。

原稿が⁽²⁾フン失^②していたから、どの程度パウンドが添削したのかもはっきりしなかった。ところが、エリオットの没後、偶然に原『荒地』が発見されて、その実態が明らかになった。

とにかく、添削と推敲はきわめて近い関係にある。推敲を不要だという人はないが、添削は個性の否定になりかねないと、歌人、俳人の間でも疑問視する向きがふえている。もし推敲がいいのなら、添削もまた必要な改良になることを認めてもよいはずである。

原稿の下書きをつくるかどうか、もしばしば問題にされる。下書きを清書するときに、必然的に推敲が行われる。もっとも清書は時間と労力を要するから、そちらに氣をとられて、肝心な表現の吟味がよろそかになるおそれはある。

清書をするときに下書きの表現を改める推敲も、かならずしも推敲した

あとの形の方がいいとは限らない。はじめの考えの方がすぐれていることもあるから、推敲すべて可なり、ときめてしまうことはできない。微妙である。あまり手を加えていると、もとの表現にあった生きのよさが死んで、一種のデカダンスに陥る。

いずれにしても、推敲、添削は個人がテキストに対して加える時間的改変、修正である。すくなくとも推敲の必要を頭から否定する人はないであろうが、推敲が筆者自らの手によってつくられる異本にほかならないと指摘されれば、意外に思う人もすくなくないと思われる。

◇ 推敲、添削が個人的、時間的であるのに対して、作品の評価の変遷は社会的、時間的な現象である。

評価の変遷を推敲と並べて考えようとするわけは、⁽³⁾ 評価の変化が目に見えない異本化と表裏をなしているからである。

天才は故郷に容れられない、という。もとの社会では添削すら拒否されていることになる。あまりにもかけはなれたものは理解できないのが人間である。第三者が、わかる、おもしろいと思うのは、知らず知らずのうちに添削という形をとらない添削をしている結果の印象にほかならない。

添削ができるには、ある程度、対象の作品、表現と共通性をもっている必要がある。天才とはまさに同時代との共通性を拒絶しているということだから、故郷において添削を受けられない、つまり、理解されない道理になる。

天才の作品といえども、理解されることを欲する。そのために異本となることを拒んではいけない。新しい解釈を許容する。それはとりもなおさず、目に見えない添削を受けて、目に見えない異本になることである。そういう新しい解釈が積み重なって、はじめは近づき難かった作品もようやくわかるようになる。その解釈には作者の予想もしなかったようなものも当然ある。

⁽⁴⁾ 異本に耐える。それが古典成立の条件である。異本化を嫌っては古典になることは望めない。むしろ、大きな古典ほど大規模な異本化をむしろ挑発しているものである。

東洋の詩人はよく、知己を百年の後に俟つ、と言った。天才は故郷に容れられず、という命題を、本人の立場からのべたものと見てよい。これを、百年経てば自分をそっくりそのまま理解してくれる具眼の士があらわれる、と解するのは皮相である。もし、不遇な詩人が後世そういう理解者のあらわれることを期待するとすれば、非現実的であろう。いまの社会で理解されないことが、百年後にわかつてもらえるはずがない。

新しい時代がやってくれば、当然、新しい異本が生まれる。どんな作品にも異本ができる。それがよくない異本であれば、その作品は埋没の道を歩み出していることになる。すぐれた異本であれば、古典の殿堂へ向かって一歩あゆみ出したと考えてよい。

百年も経てば、作品の命運はすでに定まっているはずである。それまでに悪い異本しか生まなかった作品なら、とくに忘れ去られている。もし、すこしずつでも膨張する異本群にかこまれていれば、古典の座は安^①タイになつていなくてはおかしい。

知己を百年の後に俟つ、というのは、それまでに、古典として確立するような相当大幅な異本化にあえて耐えていこうということになるであろう。

(外山滋比古『異本論』)

(注)

*ヘミングウェイⅡアメリカの作家。一八九九〜一九六一。

*篋底に秘めるⅡ人の目につかぬよう箱の底深くしまっておく。

*同工異曲Ⅱ見かけは違うが中身は同じであること。

*賈島Ⅱ中国唐代の詩人。

*韓退之Ⅱ韓愈。唐代の代表的詩人・政治家。

*T・S・エリオットⅡイギリスの詩人・批評家・劇作家。一八八

八〜一九六五。

- *エズラ・パウンドⅡアメリカの詩人・批評家。一八八五～一九七二。
- *斧鉞を受けるⅡ他人から文章に手を加えられる。添削される。
- *湮滅Ⅱあとかたもなく消える（消す）こと。
- *デカダンスⅡここでは、衰退といった意味。
- *命題Ⅱ論理学で、一つの判断を「AはBだ」のような形で表した
もの。
- *皮相Ⅱ物事の表面。うわべ。

問11 波線部③のカタカナと同じ漢字を使うものとして、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 大きな岩をフン砕する。
- 2 二国間のフン争を終結させる。
- 3 選手たちのフン起を促す。
- 4 政治家の不正にフン慨する。

問12 波線部⑥のカタカナと同じ漢字を使うものとして、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 タイ望の新作が発表された。
- 2 交通の渋タイを解消する。
- 3 害虫をタイ治する。
- 4 タイ然とした態度を保つ。

問13 傍線部(1)「時間の要素がからむものであることを、しっかりとわきまえていなかった」とあるが、賈島の推敲のどういう点を批評したもののか。その説明として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 自分の力では簡単には結論の出せない問題に一人で取り組んで夢中になり、行列と衝突してしまった点。
- 2 詩句の推敲には相当の時間を必要とすることを知らず、安易に解決しようとしてかえって時間を無駄にした点。
- 3 詩句を得た時にしばらく間を置くことをしないで、すぐに推敲を始めたために容易に結論が得られなかった点。
- 4 推敲は本来自分の力であるべきものののに、他人の助言を受けて問題を処理する添削の力を借りた点。

問14 傍線部(2)「その実態が明らかになった」とあるが、ここで筆者の言おうとしていることの説明として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 エリオットの『荒地』はパウンドの徹底的な添削があったから傑作になり得たのであり、作品の改良には作者自身の推敲だけでなく、他人の思い切った添削も必要だということ。
- 2 われわれの知る『荒地』はエリオットの原作とは異なるパウンドの改変作品で、作品の徹底した添削が原作の価値を否定してしまうほどの力をもっているのは事実だということ。
- 3 エリオットの『荒地』の原作が存在している以上、パウンドが添削によってどんなに改変を試みたとしても、エリオットの個性まで否定することはできないはずだということ。
- 4 エリオットの『荒地』のもつ個性は、パウンドの添削によって否定されたかも知れないが、原作が傑作であるかどうかの判断の基準は個性の有無にあるのではないということ。

問15 傍線部(3)「評価の変化が目に見えない異本化と表裏をなしている」と考える理由として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 作品の評価は、同じ時代や社会に生きている人々の行うものなので、それぞれの個性によって違ってくるものであるから。
- 2 作品の評価は、その作品に対する人々の共通理解の上に成り立っている、時代や社会によって変化するものであるから。
- 3 作品の評価は、わかるとかおもしろいとかいうだけの、人々の単なる印象によるために、すぐ変化してしまうものであるから。
- 4 作品の評価は、人々が自分の考えで解釈を加えることであり、時とともにその解釈に依じて違いが生じるものであるから。

問題は次ページへ続く

三

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい（設問の都合で省略した部分がある）。

「ぼく」のやっている絵画教室に、小学校教師の山口が、自分が担任をしているクラスの、二年生の男の子・大田太郎を連れてきた。太郎は絵の具会社社長の息子で、会った感じではおとなしくいい子だった。しかし、実際に絵を描かせてみると、電車や人形やチューリップといった類型的な絵ばかり描いているのだった。

太郎の場合に困らされたのはぼくが彼の生活の細部をまったくいいほど知らないことだった。鑄鉄製の唐草模様の柵でかこまれた美しい邸^{やしき}のなかで彼がどういうふうに暮らしているのか、そこでなにが起こっているのか、ぼくには見当のつけようがなかった。ピアノ教師や家庭教師をつけて大田夫人が彼に訓練を強制し、また、作法についてもかなりきびしく彼を支配しているらしい事実はわかって、太郎自身がどんな感情でそれを受けとっているのか、内心のその機制^{そく}を覗きこむ資料をぼくはなにとつとしてあたえられていなかった。彼はほとんど無口で感情を顔にださず、ほかの子供のようにイメージを行動に短絡することがないのである。^{*}フィンガー・ペイントがしりぞけられたので、ぼくはつぎに彼を仲間といつしよにぼくのまわりにすわらせて童話を話して聞かせたが、その結果、⁽¹⁾聡明な理解の表情は浮かんでも、彼の内部で発火するものはなにもないようだった。話がおわると子供たちは絵の具と紙をもってアトリエのあちらこちらにちらばり、太郎はひとりよりのこされた。ブランコにのせることもやってみたが、失敗だった。彼はぼくがこぎはじめると必死になってロープにしがみつき、笑いも叫びもしなかった。おろしてやると、この優等生⁽²⁾の小さな手はぐっしり汗ばんで、蛙^{かえる}の腹のようにつめたかった。ぼくは自分の不明と粗暴を恥じた。彼は恐怖しか感じなかったのだ。これで彼

の清潔な皮膚のしたに荒蕪^{*こうぶち}地があることはありありとわかったが、うっかりすると聞きもらしてしまいうるな、小さなつぶやきを耳にするまでは、ぼくはただその周辺をうろうろ歩きまわるばかりで、まったく手のくだしようがなかった。

二十人ほどの画塾の生徒のなかに、ひとりかわった子がいた。彼には奇妙な癖があり、なにを描いてもきつちり数字を守らねば気がすまなかった。学校から遠足に行くとき、何人参加して何人休んだかということをおぼえておいて、つぎに画を描くとき、それをそのまま再現するのである。五十三人なら五十三人の子供が山をのぼるところを彼はひとりずつ指折りかぞえて描きこむのだから、この子が遠足を描くんだといいだすと、ぼくは一メートルも二メートルもつぎたした紙を用意してやらねばならない。

⁽³⁾ある日、彼は兄といつしよに小川でかいぼりをした。そして、その翌日、酔ったままぼくのところへ紙をもらいにきたのである。おむすび型をした彼の頭のなかでは二十七匹のエビガニが足音たててひしめいていた。

「お兄ちゃん、二十七匹だぜ。エビガニが二十七匹だぜ！」

彼はぼくから紙をひったくると、うつとりした足どりでアトリエの隅へもどってゆき、床にしゃがみこむと、鼻をすすりながら画を描きだした。彼は一匹描きあげるたびにため息ついて筆をおき、近所の仲間とそのエビガニがほかの一匹とどんなにちがっていたか、どんなに泥穴の底からひっぱりだすとおかしげに跳ねまわったかと雄弁をふるった。

「……なにしろ肩まで泥ンなにつかつたもんなあ」

彼はそういつて、まだ爪にのこっている川泥を鉛筆のさきでせせりだしてみせた。仲間はおもしろがって三人、五人と彼のまわりに集まり、口ぐちに自分の意見や経験をしやべった。アトリエの隅はだんだん黒山だかりに子供が集まり、騒ぎが大きくなった。

すると、それまでひとりぼっちで絵筆をなぶっていた太郎がひよいとたちあがったのである。みていると彼はすたすた仲間のところへ近づき、人だかりのうしろから背のびしてエビガニの画をのぞきこんだ。しばらくそうやって彼は画をみていたが、やがて興味を失ったらしく、いつもの遠慮深げな足どりで自分の場所へもどっていった。ぼくのそばをとりながらなにげなく彼のつぶやくのが耳に入った。

「スルメで釣ればいいのに……」

ぼくは小さな鍵を感じて、子供のために練っていたグワツシユの瓶をおいた。ぼくは太郎のところへゆき、いっしょにあぐらをかいて床にすわった。「ねえ。エビガニはスルメで釣れるって、ほんとかい？」

ぼくは単刀直入にきりこんだ。ふいに話しかけられたので太郎はおびえたように体を起こした。ぼくはタバコに火をつけて、一息吸った。

「ぼくはドバミミズで釣ったことがあるけれど、スルメでエビガニというのは聞きはじめだよ」

ぼくが笑うと太郎は安心したように肩をおとし、筆の穂で画用紙を軽くたたきながらしばらく考えこんでいたが、やがて顔をあげると、キツパリした口調で、

「スルメだよ。ミミズでもいいけれど、スルメなら一本で何匹も釣れる」

「へえ。いちいちとりかえなくていいんだね？」

「うん」

「妙だなあ」

ぼくはタバコを口からはなした。

「だって君、スルメはイカだろう。イカは海の魚だね。すると、つまり、川の魚が海の魚を食うんだね？……」

いつてから、しまったとぼくは思った。この理屈はにがい潮だ。貝は蓋を閉じてしまう。やりなおしだと思って体を起こしかけると、それよりさきに太郎がいった。

「エビガニはね」

彼はせきこんで早口にいった。

「エビガニはね、スルメの匂いが好きなんだよ。だって、ぼく、もうせんに田舎ではそうやってたんだもの」

太郎の明るい薄茶色の瞳には、はつきりそれとわかる抗議の表情があった。ぼくは鍵がはまってカチンと音をたてるのを聞いたような気がした。

これは新発見であった。大田夫人からも山口からもぼくは太郎が田舎にいたことがあるなどとは一言も教えられていなかった。大田夫人が後妻だということを聞いても、ずっとぼくは太郎が都会育ちだと思いこんでいたのだ。⁽⁴⁾たしかに荒蕪地はアスファルトで固められているが、ずっと遠い暗がりには草と水があつたのだ。ここから掘り起こしていこうとぼくは思った。ただ、いままで伏せられていたこの事実にはどこか秘密の匂いがあつた。いまの大田夫人が田舎にいたとはちょっと考えられないことだった。ぼくは床にあぐらを組みなおすと、もっぱら話題をエビガニに集中して太郎といろいろ話しあつた。

その翌日、月曜日は太郎は家庭教師もピアノ練習もない日だったので、ぼくは彼をつれて川原へでかけたのだ。ほかの生徒には用事があるといったアトリエを閉じると、ぼくは正午すぎに大田邸を訪ねた。すでにぼくは太郎が母親といっしょに九州にいたことがあるのを彼の口から知っていたが、夫人にはなにもいわなかった。太郎はエビガニについては熱心だったが、話のなかで母親にはスルメを自分にくれる役をあたえただけで、当時のことについてそれ以上はあまりふれたがらない様子だったので、ぼくは夫人に太郎の昔をたずねることをはばかったのだ。彼女はぼくから太郎を写生に借りたいと聞かされて、たいへんよろこんだ。

「なにしろ一人子なものでございますからひっこみ思案で困りますの。おまけにお友達にいい方がいらっしゃらなくて、おとなりの娘さんとばかり遊んでおります」

夫人はそんなことをいいながら太郎のために絵の具箱やスケッチ・ブックを用意した。いずれも大田氏の製品で、専門家用の豪奢なものであった。その日は夫人は明るいレモン色のカーディガンを着ていた。芝生の庭に面した応接室の広いガラス扉からさす春の日光を浴びて、彼女の体は歩きまわるたびに軽い毛糸のしたで明滅する若い線を惜しむことなくぼくにみせた。

しばらく応接室で待っていると太郎が小学校から帰ってきた。彼は部屋に入ってきてぼくを発見すると、おどろいたように顔を赤らめたが、夫人にいわれるまま、だまってランドセルを絵の具箱にかえて背にかけた。そんな点、彼はまったく従順であった。夫人は自動車を申しでたが、ぼくはことわった。太郎はデニムのズボンをつけ、新しい運動靴をはいた。

「汚れますよ」

ぼくが玄関で注意すると、大田夫人はいんぎんに微笑した。

「先生といっしょなら結構でございます」

口調はいいねい**で**ぞ**つ**がないが、ぼくはそのうらになにかひどくなげやりなものを感**じ**させられた。いわれの**ない**こと**であ**ったが、その違和感**は**川原につくまで消えそう**で**消えず、妙にしぶとく**ぼ**くに**つ**きま**と**つてきた。

太郎をつれて駅にゆくと、ぼくは電車にのり、つぎの駅でおりた。そこから堤防まではすぐである。ぼくのいそぎ足に追いつこうとして太郎は絵の具箱をカタカタ鳴らしつつ小走りに道を走った。月曜日の昼さがりの川原はみわたすかぎり日光と葦と水にみちていた。対岸の乱杭にそって一隻の小舟がうごいているほかにはひとりの人影も見られなかった。小舟は進んだり、とまったりしながらゆつくり川をさかのぼっていた。広い空と水のなかでひとりの男がシガラミをあげたり、おろしたり、いそがしく舟のなかでたち働く姿が小さくみえた。ぼくは太郎をつれて堤防の草むらをおりていった。

「あれは魚をとってるんだよ」

「……………」

「こんな大きな川でもウナギやフナの通る道はちゃんとしまっているんだからああして前の晩にシガラミをつけておくと、魚はこりゃいい巢があると思ってもぐりこむんだよ」

橋脚だけのこされたコンクリート橋のしたでぼくと太郎は腰をおろした。橋は戦争中に爆撃されてからとりこわれ、すこしはなれたところに鉄筋のものが新設された。強烈な力の擦過した痕跡は、いまは川のなかにのこされたコンクリート柱だけで、爆弾穴は葦と藻に蔽われた、静かな池にかわっていた。太郎は腰をおろすと、絵の具箱を肩からはずし、スケッチ・ブックをあげようとした。ぼくはその手をとどめて、右の眼をつぶってみせた。

「今日は遊ぼうや。カニでもとうろうじゃないか」

「だって、ママが……………」

ぼくはつぶつた眼をあげ、かわりに左の眼をつぶって笑った。

「画は先生がもって帰ったっていえばいいよ」

「うそをつくんだね？」

太郎はませた表情でぼくの顔をのぞきこんだ。ぼくはだまってたちあがると葦の茂みのなかへ入っていった。 (開高健『裸の王様』)

(注) *機制Ⅱしくみ。

*フィンガー・ペイントⅡ指に絵の具をつけて描くこと。

*荒蕪地Ⅱ荒れ果てた土地。

*かいばりⅡ池や沼の水をくみ出して中の魚をとること。

*グワッシュⅡ不透明な水彩絵の具。

*シガラミⅡ川にくいを打ち並べ、竹や木を横に編み渡して水流をせきとめるもの。

問19 波線部A「単刀直入」の意味として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 ためらいながら話を切り出すこと
- 2 反論する余地を与えないこと
- 3 鋭い口調で相手を追及すること
- 4 前置きなしにすぐ本題に入ること

問20 波線部B「そつがない」の意味として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 抑揚がない
- 2 無駄がない
- 3 愛想がない
- 4 情熱がない

問21 傍線部(1)「内部で発火するもの」とあるが、これはどのような心情を意味しているか。最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 太郎の心に生じた、外界に対する好奇心。
- 2 太郎の心に生じた、外界に対する恐怖心。
- 3 太郎の心に生じた、外界に対する優越感。
- 4 太郎の心に生じた、外界に対する責任感。

問22 傍線部(2)「ぼくは自分の不明と粗暴を恥じた。」とあるが、「ぼく」はどういうことを「恥じ」ているのか。その説明として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 太郎が何を好きで何を嫌いかかわかる前に、これが好きに違いないと決めつけてしまったこと。
- 2 太郎と何も話し合っていないのに、彼がどのような子供であるかを勝手に判断したこと。
- 3 太郎のことをまだよく知らないのに、強引に彼の心を開かせようとしたこと。
- 4 太郎が絵画教室に慣れる前に、他の子供たちの中に彼を無理矢理入ってしまったこと。

問23 傍線部(3)「ある日、彼は……酔ったままぼくのところへ紙をもらってきたのである。」とあるが、ここでの「彼」は、どのような状態にあるのか。その説明として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 前日兄とした「かいぼり」で、二十七匹ものエビガニをつかまえた興奮が、まだ冷めていない状態。
- 2 前日兄とつかまえた二十七匹のエビガニについて、忘れぬうちに早くみんなに話したいと思っている状態。
- 3 前日に兄と一緒につかまえた二十七匹ものエビガニを、一刻も早く絵に描きたいと焦っている状態。
- 4 前日二十七匹ものエビガニをつかまえたため、次のエビガニとりのことで、頭がいっぱいになっている状態。

問24

傍線部(4)「たしかに荒蕪地はアスファルトで固められているが、ずっと遠い暗がりには草と水があったのだ。」とあるが、これは太郎の心の状態が、どのようなことを表しているか。その説明として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 母親とはほとんど口をきかず、黙々と退屈な毎日を送っている太郎にも、エビガニとりに象徴されるような、田舎の生活への憧れがあったのだ、ということ。
- 2 金持ちの家で何不自由なく生活している太郎だが、スルメ一本でエビガニを何匹もとれる方法を考えつくような、工夫好きな面もあったのだ、ということ。
- 3 童話にもブランコにも、他の子供のように興味をもつことがなかった太郎に、唯一エビガニとりという、子供らしい遊びに熱中する面があったのだ、ということ。
- 4 外界からの刺激にほとんど反応せず、何に対しても興味を示さないような太郎にも、昔、田舎で生活していた頃の楽しい思い出が、残っていたのだ、ということ。

問25

傍線部(5)「その違和感」とあるが、「ぼく」は大田夫人の態度のどのようなところに「違和感」を覚えたのか。その説明として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 いつも丁寧な言葉づかいをする大田夫人が、時々、ひどく乱暴な言葉で、無意識に使ってしまうようなところ。
- 2 太郎の身のまわりのことに細々と注意を払っているように見える大田夫人が、運動靴が汚れることを気にかけないところ。
- 3 自動車で送ると言っていた大田夫人が、運動靴が汚れる話になったとたん、自動車のことを言わなくなったところ。
- 4 「ぼく」が太郎を写生に誘ったことを喜んでいて大田夫人が、迎えに行くみたいしてうれしそうでなかったところ。

問26

この文章に登場する太郎は、どのような少年として描かれているか。最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 常に「いい子」として振る舞うよう母親から抑えつけられ、言いたいことも言えないまま、心を閉ざしている孤独な少年。
- 2 金持ちの息子として、常に身だしなみに気をつけなければならないため、思い切り遊ぶこともできず、欲求不満な少年。
- 3 唯一の楽しみがエビガニとりだが、川へ遊びに行きたいと、母親に言い出すこともできないでいる内気な少年。
- 4 いつもは母親に従順だが、必要とあればその母親にうそをつくこともできる、臨機応変な行動力をもった少年。

問題は次ページへ続く

四

次の短歌と俳句を読んで、あとの問いに答えなさい。

【短歌】

- A ただ一つ惜しみて置きし白桃しろもものゆたけきを吾われは食たひをはりけり
- B 桜さくらばないのち一ぱいに咲はなくからに生命いのちをかけてわが眺めたり
- C ゆく秋の大和やまとの国の薬師寺やくしじの塔たの上なる一ひらの雲
- D 旅たびにきて豊年まつりの歌きけり飲のぶこゑは身に沁しみむものを
- 岡本かの子
佐佐木信綱
宮 柊二

(注) *ゆたけきを＝美しくみずみずしいのを、といった意味。 *咲くからに＝咲くので。

*大和の国＝奈良県。 *沁むものを＝沁みるなあ。

【俳句】

- a 赤い椿つばき白い椿と落ちにけり
- b 咳せきをしてもひとり
- c 春風や闘志いだきて丘に立つ
- d 飮くだまして山ほととぎすほしいまま
- 河東碧梧桐
尾崎放哉
高浜虚子
杉田久女

(注) *ほしいまま＝思うぞんぶんに(鳴いている)。

問27 三句切れの短歌はどれか。最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 A 2 B 3 C 4 D

問28 Aの作者は次の短歌の作者と同じである。その作者として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- *みちのくの母のいのちを一目見ん一目みんとぞただにいそげる
1 与謝野晶子 よさのあきこ 2 石川啄木 いしかわたくぼく
3 斎藤茂吉 さいとうもきち 4 若山牧水 わかやまぼくすい

問29 A・B・Dの短歌に共通してうたわれているものとして、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 日常のなかにふと見つけた美への驚き。
2 生きるもののもつエネルギーへの感動。
3 移り変わる四季の風景へのいとおしみ。
4 若者のもつ何とはない孤独感と悲哀感。

問30 次の鑑賞文に当てはまる短歌として、最も適切なものを一つ選びなさい。

*一気に読み下すことのできる流麗な歌である。「の」の重なりが、この歌の焦点へと鑑賞者の目を導いてゆく効果をあげている。

- 1 A 2 B 3 C 4 D

問31 切れ字が使われている俳句はいくつあるか。最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 一つ 2 二つ 3 三つ 4 なし

問32 bのような俳句を何というか。最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 無季俳句 2 字足らず俳句
3 新興俳句 4 自由律俳句

問33 dと同じ季節を詠んだ俳句として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 ゆさゆさと大枝ゆるる桜かな むらみきじょう 村上鬼城
2 万緑の中や吾子の歯生え初むる なかむらたお 中村草田男
3 赤とんぼ筑波に雲もなかりけり まさおかしき 正岡子規
4 木の葉ふりやまずいそぐないそぐなよ かとうしゅうたん 加藤楸邨

問34 次の鑑賞文に当てはまる俳句として、最も適切なものを一つ選びなさい。

*見たままを詠んで、時間の経過をも伴った、華やかでいながら静けさに満ちた一つの情景を描き出している。

- 1 a 2 b 3 c 4 d

五

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

十二月十七日、十八日、浅草^{*}雜器市とて、人々正月の用意物を商ふ。その中に恵比寿^{えびす}・大黒^{だいこく}を彫刻して、いくらともなく店に出して商ふなり。しかるに、この恵比寿・大黒を盗み取りぬれば富貴^{ふうき}になると言ひ伝へて、皆々心がけて盗むこととす。【A】もつとも富貴を好み貧賤^{ひんせん}を惜しむは人情の常なれども、人の物を盗み己^{おの}れが富貴になり繁昌^{はんじやう}するとも、本意⁽¹⁾なるまじきことなり。⁽²⁾あまつさへ神仏を盗み、その神仏に願ひたりとも、⁽³⁾あに神仏うけたまはんや。【B】「死生^{めい}、命有り。富貴、天に在り。」といへり。人力の及ぶところにあらず。人、各^{おのおの}その身の幸不幸にて、親よりの讓金残らず遣ひ果たして、またその上に借金だらけになる人あり。【C】また、親は貧しけれども、子の代になり仕合はせよく、金銀を儲^{もつ}け貯^{たくは}へ、富貴になるあり。【D】たとへ何ほど貧賤にくらすとも、その貧を苦にせず貧せざること、「^{*}楽しみを改めざる。」を君子の尊ぶところなり。⁽⁴⁾神仏の像を盗みて富貴を祈るなどは、誠に愚の甚だしきなり。

(『卯花園漫録』)

(注) * 浅草雜器市 江戸時代、浅草の浅草寺で毎年開かれた歳末市。正月支度をする江戸の町人達でにぎわった。

* 死生、命有り。富貴、天に在り。『論語』顔淵篇の中の、人間の生死や富貴は天命によって定められたものであるという意味の語句。

* 楽しみを改めざる。『論語』雍也篇の中の、貧しく清らかな生活の中で道を学ぶことを楽しむ弟子の生き方を賞賛した、孔子の言葉の一部。

問35 本文中の「A」～「D」のいずれかの位置には、「これ、その身その身の運なり。」という一文が入る。入る位置として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 【A】
- 2 【B】
- 3 【C】
- 4 【D】

問36 傍線部(1)「本意なるまじきことなり」について、「本意」が意味することとして、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 本来のご利益
- 2 本来の繁栄
- 3 本来の希望
- 4 本当の真実

問37 傍線部(2)「あまつさへ」の意味として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 それだけでなく
- 2 そんなことよりも
- 3 いったいどうして
- 4 おそれおおくも

問38 傍線部(3)「あに神仏うけたまはんや」の現代語訳として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 どれほど神仏がお聞き届けくださるだろうか
- 2 どうして神仏がお聞き届けになるだろうか
- 3 どうやって神仏がお聞き届けになるのだろうか
- 4 どのような神仏がお聞き届けくださるだろうか

問39 傍線部(4)「神仏の像を盗みて富貴を祈るなどは、誠に愚の甚だしきなり。」とあるが、その理由が誤っているものとして、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 神仏の像を盗むような罰当たりな人間は、裕福になるどころかえって神仏の罰が下るだろうから。
- 2 人のものを盗むような人間が富貴を祈ったからといって、神仏が幸福をもたらすとは考えられないから。
- 3 たとえ神仏の像を手に入れて幸運を得ようとしても、人間には運勢を自力で変えることは不可能であるから。
- 4 人のものを盗んでまで裕福になろうとするのではなく、貧しさを苦にせずに生きていくことが大切だから。

問40 本文の趣旨として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 貧しい境遇を嘆くことなく心穏やかに生活するならば、それは聖人君子が目指した理想の生き方をしていることになるのである。
- 2 恵比寿・大黒像を盗むのが流行したのは、裕福になれるという噂が流れたからであるが、富を願うとかえって貧乏になるものである。
- 3 親から受け継いだ財産を使い果たしてしまう者もいれば親が貧乏でも子どもの代で裕福になる者もあり、人生は本人の努力次第である。
- 4 人間の幸不幸を判断するのは神仏ではないので、人間は神仏にたよらず、天から与えられた自分の人生を楽しめばよいのである。

問41 この文章と同じく江戸時代に成立した文学作品として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 『徒然草』
- 2 『おくのほそ道』
- 3 『方丈記』
- 4 『枕草子』



